南葵音楽文庫ミニレクチャー

左手の巨匠　レオポルド・ゴドフスキー

～頼貞が会った音楽家たち（1）

近藤秀樹

2018 年 9 月 8 日（土）11：00

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500

▲ ゴドフスキー

レオポルド・ゴドフスキー (Leopold Godowsky 1870-1938)

ポーランド出身で、アメリカで活躍したピアニスト、作曲家。その並外れた腕前のため、「ピアニストのなかのピアニスト」と呼ばれる。

最初はベルリンで、のちにパリで学び、1890 年からアメリカ合衆国で教鞭をとる。この時期に合衆国市民権を獲得。その後、ウィーン音楽院でも教鞭をとったが、一次大戦が始まるとアメリカに戻った。1922 年に来日。その後、中国、ジャワにも渡っている。

作曲家としては、演奏の極めて難しいピアノ曲を数多く作曲し、また、独自の超絶技巧を用いて、ショパンその他のピアノ曲のユニークな編曲を行った。それらの作曲・編曲は、あまりにも演奏が難しく、また、編曲作品は「原曲を歪めている」と見なされ、一時忘却されたが、近年、再評価が進んでいる。

1930 年、レコーディング中に脳卒中を起こし、以後、演奏活動から身を退く。1938 年没。門人にゲンリフ・ネイガウス、ホルヘ・ボレットらを数える。

ゴドフスキー　《ショパンのエチュードによる練習曲》（*Studies on Chopin Etudes*）

フレデリック・ショパンの《エチュード》(練習曲集)を、ゴドフスキーが編曲もしくは改作。
1894-1914 年にかけて書かれ、1914 年に出版。

・ショパンのエチュード: 作品番号のない３曲を含めて、全部で 27 曲。
・ゴドフスキーの練習曲: 全部で 53 曲。しばしば１つの原曲をもとにした練習曲が複数ある。
　　Ex. 〈黒鍵のエチュード〉→ ７通りの練習曲

第５曲: ショパン〈別れのエチュード〉にもとづく練習曲
・原曲を左手だけで演奏できるように編曲。
・原曲はホ長調だが、これを変二長調に変更。

ゴドフスキーの来日公演

1922 年（大正 11 年)に来日。同年 11 月 1 日～5 日に帝国劇場でリサイタルを開催。
以下は第三回(11 月 3 日)リサイタルのプログラム。

PROGRAMME

1. Twelve Symphonic Studies ... ...*Schumann*

Interval 15 M.

2. a) Musette en Rondeau } Rameau (1683-1764)
   b) Tambourin }
   c) Pastorale (Angelus) Corelli (1653-1713)
   d) Gigue Locilly (1660-1728)
   ... ...from Renaissance by *Godowsky*

   e) Nocturnal Tangier
   f) Memories
   g) Sylvan Tyrol
   h) Music Box
   i) Quixotic Errantry
   ... ... from "Triakontameron" thirty moods and scenes by *Godowsky*

Interval 10 M.

3. a) Impromptu, Op. 29 (A flat) ... ...*Chopin*
   b) Fantasie-Impromptu... ... ... ,,
   c) Nocturne Op. 55, No. 1 (F minor) ... ,,
   d) Waltz Op. 64 No. 1 (D flat)... ... ... ,,
   e) Scherzo Op. 39 (C sharp minor)... ... ,,
   f) In Autumn... ... ...*Moszkowski.*
   g) Military March ... ...*Schubert-Tausig*

1. シューマン《交響的練習曲》

2. ゴドフスキー《ルネサンス》抜粋
   ※バロック期の鍵盤楽器のための音楽を編曲したもの。

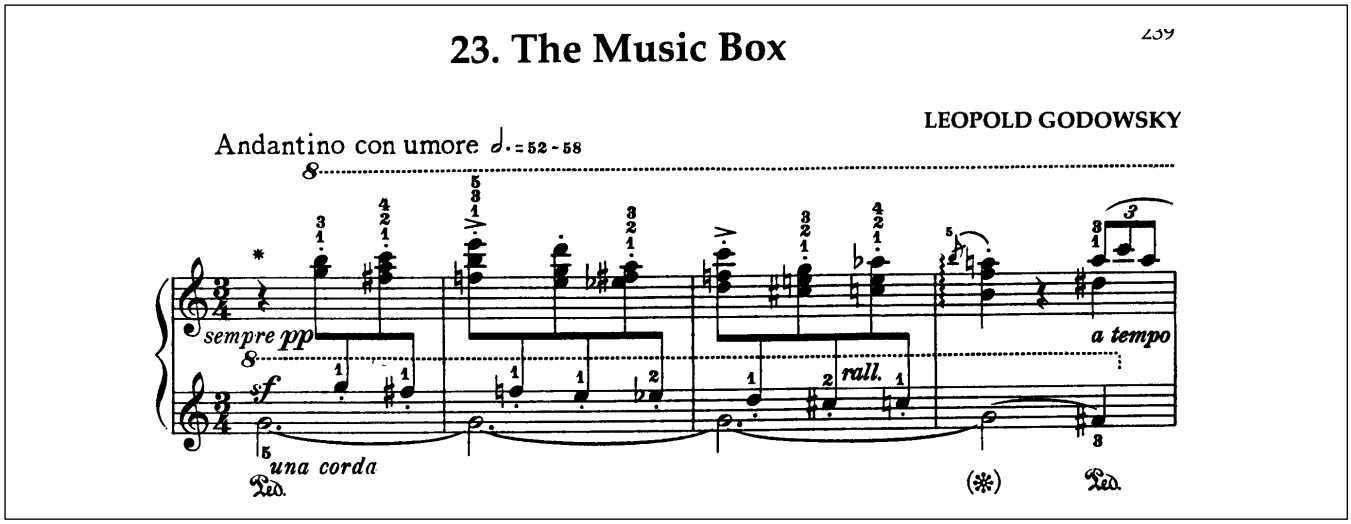
   ゴドフスキー《30 日物語》(30 の気分と場景) 抜粋

3. ショパン《即興曲》[第 1 番]変イ長調 作品 29
   ショパン《幻想即興曲》
   ショパン《夜想曲》[第 15 番] ヘ短調 作品 55-1
   ショパン《ワルツ》[第 6 番] 変二長調 作品 64-1
   ショパン《スケルツォ》[第 3 番] 嬰ハ短調 作品 39
   モシュコフスキ《秋に》[変ロ短調 作品 36-4]
   シューベルト=タウジッヒ《軍隊行進曲》

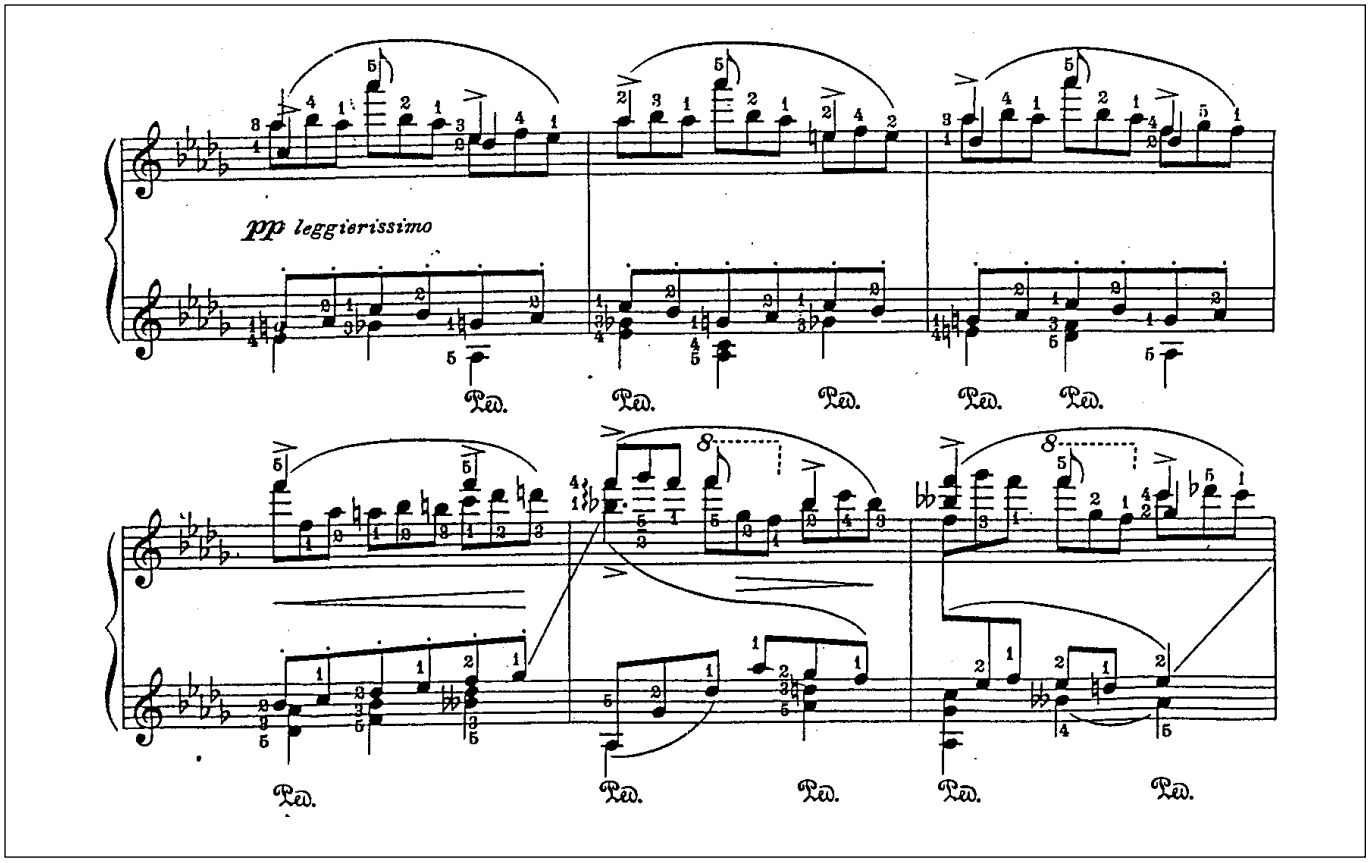
https://blog.goo.ne.jp/1971913/e/5386e47b28c4b61df817c1e2df6f207a

ゴドフスキーの作曲と編曲（来日リサイタルのプログラムより）

作曲: 《音楽おもちゃ箱》(《30 日物語》第 23 曲、1919 年)



編曲: ショパン《ワルツ》作品 64-1［子犬のワルツ］



ゴドフスキーが受けた日本の印象

> “The people here love music and are making great progress in the appreciation and understanding of good music; in a short time this country will be a Mecca for artists. Japanese are quick to grasp and understand.

http://www.interlude.hk/front/godowsky-java-suite/

ゴドフスキーと頼貞

『薔庭楽話』p.210 ～ p.212 「大音楽家の来朝 洋琴家レオポルド・ゴドウスキー」

・頼貞はゴドフスキーを晩餐に招待。

a. サン=サーンスの話題

ゴドフスキーは 1886-90 年にパリでサン=サーンスについて勉強した。

cf. ゴドフスキー編《白鳥》(ピアノ独奏版)

b. ヴァイオリニストのエルマンとハイフェッツの話題

cf. ハイフェッツ編ゴドフスキー《古きウィーン》

(《30 日物語》第 11 曲、ヴァイオリン独奏版)

内気なヴィルトゥオーソ

ゴドフスキーの音楽(とりわけ編曲と演奏)に対する評価

1. 19 世紀のピアノの達人(ヴィルトゥオーソ) たちの系譜につらなるもの。
   - 楽譜を自由にアレンジ。演奏効果を追求。
   - 作曲者の意図よりも、自らの超絶技巧を発揮して聴衆を魅了することを優先。

2. 超絶技巧が自己目的化したもの。
   - 技巧が高度すぎる。音楽が複雑すぎる。
     → ① 一般の聴衆にはわかりにくい。② 難しいわりに効果が上がらない。

   - なぜ複雑になるのか？
     隙間のない音楽。真空恐怖症の音楽？
     左手の過剰な (?) 活用。右手も左手も技巧的で複雑。

     ゴドフスキーの編曲は、ピアノの達人芸の“失敗例”？
     (cf. 大久保賢「奇術師としてのヴィルトゥオーソ」in 岡田暁生編著『ピアノを弾く身体』)

3. ピアニストのためのピアニスト。
   - ゴドフスキーの真価は同業者にしかわからない？
   - あがり症で、舞台では実力を十分に発揮できなかった？

左手の巨匠ゴドフスキー

左手重視の考え方: 右手よりも左手のほうに大きな可能性を見る。
《ショパンのエチュードによる練習曲》でも、左手の技術の開発を重視。

左手だけで弾くための編曲
- 合理的。左手だけで弾くときのマイナス面がプラスに転じるように書かれている。
  Ex. ポジション移動と“間”の連動
- 発想の転換
  左手だけでもこれだけ表現ができる ×　→　左手だからこそこのような表現ができる ○

現代の“左手のピアニストたち”
右手に障害があるので仕方なく左手だけで頑張る →　“左手ならでは”の音楽を奏でる
(cf. 有馬圭亮「片手のためのピアノ作品」)

エピローグ: 《6 つのワルツ=ポエム》*6 Waltz-Poems* (1928–29)
左手だけで弾くゴドフスキーのオリジナル作品。